2008年秋号
JIM-NET
الشبكة الطبية اليابانية العراقية

JIM-NET便り

いよいよ始まる 限りなき義理の愛大作戦2009

年が明ければもうすぐバレンタイン! 義理チョコシーズン到来です。JIM-NETは今年もこの期間に一口500円の募金をしてくださった方に、お返しのチョコを差し上げる「限りなき義理の愛大作戦」を展開します。

松本事務所1階倉庫には発送用封筒が入った段ボール箱が…。

■ 今回のテーマは「助け合い」

使い古された「助け合い」という言葉。でも、この言葉を実践することが子どもたちの命を明日へとつなぐことにつながります。

もたちは決して希望を捨てず、友だち同士、家族同士、助け合い、はげましあいながら生きています。そんな子どもたちに、今年も多くの皆さんからあたたかいエールを送ってください。そして、子どもたちの助け合いの輪に加わってください。

■ 松本事務所は臨戦態勢

今回も発送作業を担当するのは松本事務所です。

松本事務所の1階倉庫には、すでに発送用封筒が入った段ボール箱が山積になり、これから始まる発送作業を待ち構えています。松本事務所で発送作業の陣頭指揮を執るのは、JIM-NET構成団体のひとつJCF(日本チェルノブイリ連帯基金)のスタッフ森たかのさんです。森さんは、地元紙にそのノウハウが載るほどの収納の達人。森さんの整理術がチョコの発送にも活かされることになります。森さんの娘さんたちも学校帰りに事務所に立ち寄り、作業を手伝ってくださっています。

学校帰りのボランティア

バスラ、緊急水支援

8月から10月中旬にかけ、イラク中部バベルを中心にコレラが流行しました。昨年もイラクではコレラが流行しましたが、これは上水道や下水道などのインフラの整備が進んでいないことと無縁ではないようです。治安は回復しつつあると言われるイラクですが、人々の日常生活はまだまだ回復していないようです。

JIM-NETは、バスラ地区でもコレラが発生したことを受けて、ラマダン募金を呼びかけ、それをもとに病院とシャットル・アラブ川沿いの地域に合計7200本のペットボトルを配る緊急水支援を行いつつ、汚染した水を飲まないように注意を喚起しました。以下、現場からの報告です。

水を受け取りに集まった子どもたち

バベル	222人
バグダード	69人
バスラ	44人
カルバラ	34人
ディーワニーヤ	30人
アンバール	8人
ナジャフ	5人
ミーサーン	3人

＊　＊　＊　＊　＊

コレラに関する報道が、現地メディアでも少なくなりつつあるが感染者の数は増えており、10月4日のイラク保健省の発表によると感染者は417人、コレラによる死亡者は6人になった。

特にバスラにおける増加が、ここ数日、目立ってきているようである。バスラでは、コレラ発生が報じられた初期の段階で、高齢の女性が感染により死亡したことが確認されている。また感染の多くは、抵抗力の弱い子供である。地域的には、バスラの中でもほとんどの感染者がアブー・ハスィーブという地区から出ていることが確認されている。アブー・アルハスィーブ地区はどういうところなのか、ローカル・スタッフのイブラヒムに聞いてみた。

イブラヒム：「ここは、チグリス・ユーフラテス川のすぐそばに位置しており、ナツメヤシの木が豊富に植えられているところです。ヤシが豊富に植えられている様子はバスラを象徴しているといってもいいでしょう。とても美しいところなのです。しかし非常に貧しく、公共サービスが行き届いてない地区でもあります。そのため、清潔な水を供給するネットワークが遅れていること、それに加え、川に隣接する地域であることから、この地区の多くの住人が川から水を汲み、それを飲んでいるのです。また今年の3月に政府が行った軍事作戦で多くの被害が出たところでもあります。ここアブー・アルハスィーブは今年になって多くの困難に見舞われた地域なのです。」

このような状況の中、JIM-NETは、ペットボトルの水支援を決定し、JIM-NET構成団体の一つ「アジアと結ぶ市民の会・長崎」の支援で1200ドル分のペットボトルを購入した。

イブラヒムによると、10月4日、バスラから20kmほど西のイラン国境近くの町アブ・アル・ハスィーブの中でも都市部とは離れたバーブ・アルアリーズ地区、バーブ・アルタウィール地

区、ハマダーン地区、ムナッザマ地区などを車で移動しながら水の供給を行った。この地区は川に隣接し、コレラに汚染された水を飲む危険性が非常に高い地域である。

水を受け取りにきた、この地域に住む老女：「孫のハイダルが(1歳)がコレラにかかって入院してしまいました。水が汚いためです。」

少女：「きれいな水をありがとう、でも病気にかかるのが怖いから、水をもう一度配って欲しいな。」

住民男性：「ここではたくさんの人がコレラにかかっている。でも政府は予防の宣伝をするばかりで何もしてくれないんだ。強い怒りを感じるよ。」

現在バスラでは、ここアブー・アルハスィーブ地区以外でもクルナ地区、サラージャ地区、ズバイル地区でも感染者が出ているようである。イブラヒムの友人の息子もコレラにかかっているという。

バスラはこれまでにも、水の問題に悩まされ続けてきた。水を供給するためには電気が必要だが、その電気の供給が安定しない。電気省大臣カリーム・ワヒードは9月の記者会見で「電気の安定供給のためには、治安の安定が最も重要である。」と述べた。彼が電気省大臣に就任して以来、電気事情の改善がみられないために住民が解任要求のデモを行ったが、それに対するコメントである。イラクの治安は改善の傾向にあるとはいえ、いつ何時、身を潜めていた武装勢力が戻ってくるかわからない。特にバスラはイランとの国境に接しており、イランからやってくる武装勢力の巣窟になっているとされている。

前述のアブー・アルハスィーブは現在のバスラの保健衛生状況の悪さを象徴しているようなところである。コレラ以外にも、ここにはがんに冒された子供がおり、バスラ小児産科病院で治療を受けている。治療のためには清潔な水や、電気が欠かすことができない。これまでもこの病院では水がまったく来ないなために治療に大きな障害が出てしまっていた。水の問題はもちろんバスラだけではない。コレラが最も蔓延しているバベルでは、除去しにくい発がん性物質が飲み水に含まれており、バベル水道局長は問題解決のため、政府に介入を求めている。

現在のイラクは一般市民の衛生環境の悪さが目立つ。コレラ以外にもイラク北部のドホークで炭素症に感染した患者が20人報告されている。さらに先月カルバラでは放射性廃棄物が不法投棄されていたとのニュースもあった。イラク政府は、現在のところ、州議会選挙法問題やアメリカとの治安協定で手一杯のようすだが、何よりもこれからのイラクを作っていく国民の健康に関心を払ってほしいものだ。

加藤 丈典（JCF/JIM-NET）

緊急水支援収支報告

収入		支出	
ラマダン募金	18万円	病院分 ペットボトル(3200本)	1440ドル
アジアと結ぶ市民の会長崎	12万円	病院分 運送費	70ドル
収入合計：30万円		周辺村落分 ペットボトル(3200本)	1440ドル
(2912ドル) 1ドル=103円		周辺村落分 運送費	120ドル
		支出合計	3070ドル

収支合計 ー158ドル (不足分は一般募金より補填)

世界を描く子どもたち ～絵画展を終えて～

Blue Birdsのメンバー（会場入り口で）

10月初旬、青山学院大学の有志学生 Blue Birds の皆さんにより、『DRAW THIS WORLD』というタイトルで、アフガニスタン、アメリカ、そしてJIM-NETのイラクの子どもたちの絵による絵画展が開催されました。絵画展を終えたBlue Birdsの皆さんからのコメントをいただきました。

■ 私たち、青山学院大学国際政治学科4年の有志団体Blue Birdsが主催団体となり、JIM-NETと国境なきアーティストたちから絵をお借りして学内で行った絵画展『DRAW THIS WORLD －子どもたちが描いた世界－』展は、10月12日、6日間の開催期間を終えた。あっという間の、6日間だった。

3月末に都内で行われていた展示を見て、私は、「大学でもやりたい!」と、計画性もなく思った「言いだしっぺ」であったが、この企画を学内で実現させるまでには、その時には予想もしていなかった壁が待ち受けていた。私ひとりでは、絶対に乗り越えられなかったし、実現できなかっただろう。反省点も多々あるけれど、それ以上に学ぶこと、考えることもたくさんあった。Blue Birdsの仲間をはじめ、協力して下さった全ての方、絵を見て感じたことをたくさんのことばに書き残していって下さった方々、イラクの子どもたちへ絵を描き残して下さった方々、絵を描いた子どもたちに、心から感謝したい。（**山口 織枝**）

■ 今回の絵画展で、特に主催者だからこそ感じることのできたこととして、子どもの絵の持つ「力」の想像以上の大きさがあります。時には、人に涙を浮かばせ、悩ませ、考えるきっかけを与え、元気を与え、絵を描く楽しさを思い出させ…。こんなにも多くの人に、それぞれ異なる感情を与えられるモノが、この世の中にどれほどあるでしょうか。また、自分自身も鑑賞者として、絵から子ども達の「願い」を感じずにいられませんでした。もしも劣化ウラン弾がなければ、もしも戦争が起きていなかったら、その「願い」は当たり前だったかもしれないと思うと、やりきれない気持ちになります。こんな思いを与えてくれたこの子ども達との出会いを大切にしていきたいです。（**神宮司 真奈**）

■「子どもの頃に描いた絵を覚えていますか」今回の展示会で、私が幼稚園時代に使っていたクレヨンをお絵かきコーナーに置いた。お客さんはそのクレヨンを使いながら、すごく楽しそ

うに絵を描いてくれた。私も会場内で久しぶりに絵を描いてみた。あれ、絵ってどうやって描くんだっけ。クレヨンのにおいが鼻をつく。触ると、手に色がくっついた。そういえば小さいころ、女の子や家族の絵を描くのが好きだったなぁ。何色が一番早くなくなったっけ――絵を描きながら、そんな想いをめぐらせた。

日本の子どもが描く絵と、イラク、アフガニスタン、ニューヨークの子どもが描く絵は、その内容やタッチ、色使いに至るまで、すべてが異なる。しかし、どれだけ彼らが描く絵が違っても、その絵に表わされるのは、私たちが生きる「世界」なのだ。

「DRAW THIS WORLD」――直訳すれば「この世界を描く」である。子どもたちの絵を見て、やはりこの世界は一色で表すことができないことを痛切に感じた。しかし、何色にも塗り分けられるこの世界が「つながっている」ことを、心の底から認識できる、そしてそれを絶対に忘れない人間になりたい。（**當舍 小百合**）

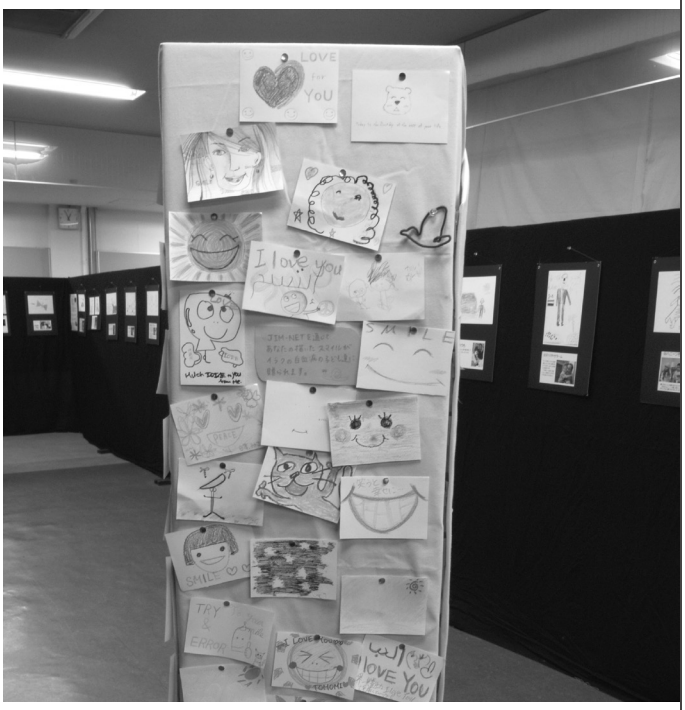
■ 展示会をするにあたり、劣化ウラン弾について調べました。子どもたちの病気と因果関係があると言われている劣化ウラン弾、今まで、名前は聞いたことがありましたが、核廃棄物として処理が難しいので兵器として利用されるようになったこと、半減期が45億年であること…などは初めて知りました。展示を見に来てくれた方の中にも、劣化ウラン弾のことを初めて知ったという方が何人かいました。

私は、今すぐに劣化ウラン弾の使用を止めさせる力は持っていません。でも、劣化ウラン弾がどんな兵器なのかをまずは自分が知ること、そしてそれを人に伝えることが、劣化ウラン弾の使用を減らし、劣化ウラン弾による病気の子どもたちを増やさないことにつながるのではないかと考えています。（**松枝 望**）

■ アートの力。今回の展示会で最も感じたことである。世界には戦争を目の前にしている子供たちが存在し、戦争という力は子どもの純粋な心に大きな影響を与える。私たちは現地の子どもたちの絵を展示することで、このようなことを少しでも想像していただき、何かを感じとってもらいたいと考え、今回の展示会を企画してきた。

しかし、企画に参加しておきながら、正直私は不安だった。私たちの想いが本当に人々に伝わるのか…。

だが、子どもたちの絵の訴える力は大きかった。結果的にはたくさんの方が想像以上に多くのことを絵から受け取り、それをアンケートに記入して下さった。テレビや写真では伝わらない、アートの力がそこにあったのだと思う。アートをうまく使って、今後も何かを伝え続けていきたい。（**山岡 玲子**）



来場者が描いた絵が貼られた“柱”

ヨルダン・シリア 報告

事務局の榧野・大嶋は10月8〜23日、ヨルダンとシリアでの研修で、現地で活動するNGOとのイラク避難民の家庭訪問や小児科病棟の視察を通して、現地の協力団体との関係を強化し、今後の活動のためのヒントをたくさんいただいてきました。私たちが見た、現地で活動するNGOについて報告をします。

アンマンで治療を受けているイラク人少年ハサン君(右)と大嶋(左)、榧野(中)

■ アファーク・プロジェクト

JIM-NETではヨルダン王室の基金に年間200万円の支援を行なっています。

このヨルダン王室の基金により、イラクでは治療が難しいと診断された白血病や小児がん・血液の難病の子どもたちがヨルダンで治療を受けています。

治療を行なっている「キングフセインがんセンター」で、つらい治療を受けている子どもたちに、少しでも楽しい時間を過ごしてもらいたい！と、日本文化を知ってもらう意味も込め、縁日企画を行なってきました。

また、治療が長期に渡り経済的に困っている家族の生活支援もJIM-NET構成団体の「アラブの子どもとなかよくする会」と「スマイルこどもクリニック」ではでは行なっています。それが『アファーク・プロジェクト』です。アンマン滞在の患者家族の手芸品を日本で販売し、治療を続けられるよう支援するとともに、日本とイラクの文化交流をう支援するとともに、日本とイラクの文化交流を目指しています。

アファーク・プロジェクトでは、カレンダー作りの真っ最中！ 治療や通院で大変な家族の負担にならないように、効率的に作業過程を考える西村さん(アラブの子どもとなかよくする会)。今年のカレンダーもとても素敵な仕上がりです。

今年のカレンダー

お問い合わせは、アラブの子どもとなかよくする会
ファクス:0422-44-0364 メール:afaq@zav.att.ne.jp へ

アラブの子どもとなかよくする会の西村さんは足しげく各家庭を回り、製品作りのアドバイスを行ないます。

■ CRP(collateral repair project)のマイクロプロジェクト

マイクロプロジェクトによるミシンの支援

イラク避難民の家族の現状を知るために、アメリカのNGO「CRP」の家庭訪問に同行させていただきました。CRPのアンマンチームでは、国連などから経済的なサポートを受けることができずにいるイラク避難民を中心に支援しています。パソコンを支援して翻訳や書類を作る仕事ができるようにしたり、ガス・オーブンレンジを支援してケータリングの仕事ができるようにしたりするのがCRPのやり方です。仕事内容は各家庭によって様々で、裁縫やピクルス作りなども行なっています。生活する糧としてのビジネスを作り出すサポートがCRPの『マイクロプロジェクト』です。

どの家族も着のみ着のままヨルダンに逃げて来ています。車も家もすべて売り払い、仕事もなく、生活に困窮している家族ばかりでした。そして、どの家族もつらい経験をしています。あるお父さんはこんな話をしてくださいました。

「子どもが誘拐され、受け渡しの際に犯人と銃撃戦になり、犯人の1人を殺してしまった。犯人グループが覆面を取ったとき、なんとその中に自分のいとこがいた…。そんな事件を乗り越え、3人仲良く暮らしていたのに、妻が甲状腺のがんになってしまった。家賃も払えない状況で、妻は自分の治療費よりも子どもの将来を考え養育費に充ててほしいと言う。難民申請に行ってもいつも手応えなく帰ってくるだけだ…」

また、あるおじいさんは、

「息子をイラン・イラク戦争で亡くしてから、娘はその後結婚もせず、ずっと家族の稼ぎ頭として働いてきた。そんな娘が乳がんになってしまった…。妻も心臓病で手術して入院してから認知症になってしまったようだ」と涙を流していました。

イラク人だからという理由でいじめられ、問題が起きて学校に呼ばれることもあるし、心配で外で遊ばせることも出来ない、という子育ての苦労もうかがいました。

■ NGOバスマ

シリアのNGOバスマでは、小児がん患者の生活支援・心理ケア・院内ワークショップ等のサポートだけではなく、病院の薬剤調達や、医師・看護師の派遣も行っており、非常にしっかりと病院・患者との連携を図りながら活動しています。

今回は、JIM-NETのイラク人スタッフのイブラヒムがバスマで研修し、その一部に同行しました。

患者家族に病気との向き合い方のレクチャーがきちんとなされていること、遠方から来る患

病院内でのバスマの活動

者家族のアパートメントがあることなど、多くの問題をNGO主導で取り組んでいる様子にとても感銘を受けました。

■ おわりに

イラク避難民家庭訪問で訪れたどの家庭も、明るく丁寧に私たちをもてなしてくれ、子ども達は朗らかに笑顔を向けてくれます。イラクの人たちの強さをひしひしと感じました。
お金だけが支援ではない、その場しのぎの支援ではなく、生活していくためにどのような援助が必要なのかということを二つのプロジェクトから学びました。

ヨルダンでは王室基金がNGOの形態をとって子どもたちの治療費を支援し、シリアでは民間NGOのバスマが活躍しています。ヨルダン・シリアでは国家財政が厳しく、国が薬を100%供給できず、民間の力が必要なのです。
イラクでも同じように薬が足りていません。しかし、治安が不安定なままのイラク国内で民間の力が動き始めるには、まだまだ時間がかかるでしょう。
現在、JIM-NETローカルスタッフのイブラヒムは、イラク・バスラで一人で活動していますが、一人の活動には限界があります。バスマのような患者をサポートするシステムを作り、イラク人が自分たちの力で運営できるよう、JIM-NETも支援を行なっていければと思いました。

ご寄付と一緒にいただいたメッセージから

サポーター会員入会・ご寄付ありがとうございました

○ 世界中、誰一人もれることなく幸せになりますように。イラクの子供、人たちの激痛が少しでも緩和されますように。
○ お役に立てますように。情報が不足している日本の社会に具体的な行動の定義を示すことが大切だと感じています。活動に敬意を表します。
○ 六ヶ所村ラプソディー、ヒバクシャを見ました。小さき協力で申しわけありませんが、送ります。生命は一つ。みんな繋がっている。子どもたち孫たちと姿がダブってしまいました。
○ イラクの子どもたちの薬代として使用してください。
○ 皆様の努力が実り、すべての子ども達が平等に、国内で最良の治療を受けれるように願っています。
○ 少ないですが、どうぞ心もちのカンパです。よろしく。
○ 子どもたちの病気がよくなり、一人でも多く、助けていただきたいと希望します。
○ バスラの病院の水不足は解決したのでしょうか? 水でも医薬品でも、ガンや白血病に苦しむイラクの子ども達に届けてあげてください。スタッフの方々のご健康・ご安全をお祈りします。
○ 8月13日に行った集会「平和を願い記憶しよう八月十五日」でよせられたカンパです。イラクの子供たちのために使ってください。
○ 今回はお便りをいただきありがとうございました。世界中の人々が平和に暮らせるよう祈っています。

JIM-NET便り 2008年秋号
発行：日本イラク医療支援ネットワーク
発行日：2008年11月17日
〒171-0033
東京都豊島区高田3-10-24 第二大島ビル303